

増田明利『仕事がない!』平凡社 2011年

ルポライターである筆者が、失業して求職中の人に対しておこなったインタビューをひたすら書き並べたものである。20代11人、30代11人、40代2人、50代12人の総勢36人の聞き取り内容をきっちり4ページずつにまとめてある。どこからでも読み始められるし、一人称的語り口を混ぜながら、人物像や生活状況が浮かび上がるように書かれており、非常に読みやすい。

登場人物に生活保護受給者はいない。雇用保険受給中の人もあるが、多くは短期の仕事でわずかな収入を得て当面の生活をつないでいる。後者は統計上では就業者に数えられる。しかし、会社の経営不振、合併などによるリストラなどで正社員の仕事を失い、あるいは正社員の仕事につけず、契約社員、派遣社員として働いていたが、今やその仕事も失って、継続的な就業が確保できていない、『仕事がない!』人々である。

登場人物の多くは、失業した当座、何とかなると思っていたが、不採用、あるいは採用面接にもこぎつけられない状況が続いて、現実の厳しさを痛感していったと語っている。若者は初職のつまずきがそのままコースアウトにつながり、50代では長年働き続けた企業から放り出されて、それまでのキャリアは全く評価されず、求職活動の中で、人としての誇りを傷つけられていく。

読み進めると、働けないことのつらさがひとり一人の声から伝わってくる。ハローワークがセイフティネットとして十分機能していないこと、非正規労働が雇用側に有利なくみとして機能していることも実例を通して改めて明らかになる。

リーマンショックによって5%台に跳ね上がった完全失業率がなかなか下がりず、今年4月の速報値でも東北3県を除いて4.7%となっていること、今年の大学生の就職率が就職氷河期であった2000年と並ぶ過去最低の91.1%となったこと、生活保護受給者が1952年以来、59年ぶりに200万人を突破したことなどが相次いで報道されている。したがって、就職難、生活難で追い詰められている人が増えていることは統計データにも示されており、本書に登場する人々が例外的な存在だと切り捨てることはできない。

「人並みに働けば、裕福とはいわないまでも世間並みの生活ができる。多少の不満があっても安心して働く場所があるから頑張れる。こんなことは初歩の初歩だろう」と著者は巻末に書いているが、本当にその通りで、これが実現できなくなった日本の現状は深く憂慮される。日本経済再生のためにも人的資源を守っていくことは不可欠であり抜本的な雇用対策を推し進めることが強く求められる。(滝口哲史)